

慈

光

第二十八卷

第十二号

昭和二十四年七月二十五日 第三行（種郵便物認可）
（毎月一回・十五日発行）

（通三三〇号）

次

自然と廻心……………近角常観……………(1)

絶対他力と体験……………池山栄吉……………(8)

信仰（仏凡一体）

助道の人の法……………高千穂徹乗……………(15)

念仏詩抄……………木村無相……………(20)

円融至徳の嘉号……………花田正夫……………(22)

自然と廻心

近角常観

唯円房が涙をふるって『歎異抄』を書いたのも、当時信仰上の間違いが非常に多かった事と思われるが、とかく信仰上間違い易いのは何かというに、

一方に於て如来の慈悲はこの如き罪の深い惡逆の者を見捨てぬとあるお慈悲であると聞くから、その慈悲に慣れてどのような悪い事をしてもお慈悲は捨てて下さらぬ、悪い事をしてかまわぬのであると、横着になる方の間違いである。こうなると如来の親のお慈悲という方はしっかり頂かずに、我とわが身で悪い事をしてよいというような横着心を起こすようになる。

また一方には、悪い事をしてよいなどと言うてはならぬ、悪い事をしてそれなりでよいということはない、一つ一つ心を改め気を取りなおし、悪をやめなければならぬのであるという方の間違いが起つて来るようになるのである。結局、間違いはこの二通りである。これは信仰上の問題にはほとんどつきもので、悪いこととしてもよいのじゃと

するのが「自然に腹をも立てて云々」のお言葉であるうと思ふのである。これは私はじめこの心が起りやすいのである。

すると一方に信心の行者とある者が、そんなこととして居てはならぬ「信心の行者、自然に腹をも立て、口論をもしてはかならず廻心すべし」と、廻心せねばならぬ、善い心を起こさなければならぬであると云い出す事となるのである。

すると、いよいよお慈悲に気付かせて貰うのは何処であるか。前の自然にして居てよいのでもなければ、一度一度に、いかぬいかぬと廻心するでもない。すれぱいずれが真実の道であるか。今の第十五章はここをお示し下されたのである。一方に悪いこととしてもよいというから、一方に廻心せねばいかぬとなるのである。どちらも間違いである。次のお言葉には、

……この条断惡修善のこちか。……

一度一度に心得ちがい直すというは、一度一度に善を修し惡をやめる断惡修善の心地か、である。一辺一辺に廻心して、一辺一辺に自分の罪を滅して助かる我々の往生ではない。それでは自然まかせて助かるのか、というにそうでもない。さて、真の自然、真の廻心とは何であるか。真の廻心とは、そのような自分の心でこしらえた廻心ではない

いう方と、悪くはいかぬという方と、この左右何れかに行くのが昔からのきまりになって居るのである。

ところでたとえ言へば、親は子供が可愛い、如何程悪くもその者を見捨てぬのが親じゃと云つて下さる。これを頂く子供の方で、親は悪い事してもかまわぬ、悪い事してもよいと言つて下さる、それでは此のままでもよいのであるかと、これでは親の慈悲がわかつたのでもなんでもない、親のお慈悲に慣れて自分の心まかせにして居るといふものである。『歎異抄』の第十六章に

信心の行者自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて、口論をもしてはかならず廻心すべしということ。……

この「自然に腹をもたて云々」であるが、自然に腹が立つのだから仕方がないと、何事も自分の心まかせにして、かくしてもかまわぬ、差支えがないと自然にまかせて日暮し

ぞ、

……一向專修のひとにおいては、廻心ということ、ただひとたびあるべし。……

である。我々が真に如来のお慈悲をいただき、真に廻心するのは、ただ一度である。一代に廻心懺悔は唯一度あるのみである、而して

……その廻心とは、日ごろ本願他力真宗を知らざるひと弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころろにては往生かなうべからずとおもいて、もとのころろをひきかえて本願をたのみまいらすをこそ、廻心とはまうし候え。

今日話したいのはこの一つである。ここ一つを聞いてさえいただければ、外に言うことは無いのである。表より裏より、色々言うが、きわまる所はこのひと所である。我々自分の心が悪いとて、悪いまま自然にまかすのでもなければ、又悪い心をわれとわが手でおさえるのが本当でもない。何が本当かと言へば「日ごろ本願他力真宗を知らざる人」である。日ごろ広大な弥陀の本願を知らざる人が、という、ここひと所が肝腎である。

なお詳しく言うならば、我々がこの世で自分の惡心を止めたいとて、止められるような人間ではない。善い心をおこしたいとて、起るような者ではない。罪惡深重の身なの

である。善い心を起せ、悪い心を止めよ、綺麗な心にならねばならぬと云われても、実はそうは思うも、そうなることが出来ぬのである。然らば、そうならいでもよい、ならいでも差支えがないと聞いて、それならこれなりでよろしいかと安心出来るかというに、仏がかく言うて下さるのだらうと思ひ、幾度自分の心にきめつけてみても、矢張りこれよりとは安心することが出来ぬのである。

して見れば、我々悪くてもよいと安心は出来ず、それかと云つて善い心としては微塵も起すわけに行かず、左右いずれにも行きようの無い我々である。ところが、仏の本願はその行きようの無い我々、思うまじきを思い苦しむ我々を見て、かかる罪深きしてみようのない者を、哀れと見て下さるが、如来の広大な本願のおまこと心である。悪くてもよいと云うて下さるのではない。子供が一步でも悪に近づくのを見て、それでよいという親は一人もないのである。

けれども、その善くない悪い事をする子供故に、その者を如来広大の親の恵みより見て下され、その悪い事のやめられぬ者故に、いよいよその者が可哀想じゃ、どうかその心をひるがえして、早くこの恵みに気付かせてやりたい、という、これが如来の親心、この外に仏の本願はないのである。いつも言う『歎異抄』第一章のお言葉

弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、ただ信

の子を憶するが如し。大論に曰く、譬えば魚母の若し子を念ぜざれば、子即ち壞爛する等の如し。

と、十方の如来が私を哀れんで下さるは、丁度母の子を思うが如くである。それは、魚の母が子を育てるのに、子を念ぜざれば、子はみな腐れ爛れてしまう。魚の子の育つのは、ひとえに魚の母の念力によるのである。そのように十方諸仏は我々十方衆生を哀れみ、この私に大悲の親の思召を知らせようとて、永劫の昔から我々を護念して居て下さるのである。その護念もひと通りの護念でなく、母の子を思うが如く、である。それも子一人に親一人、と云おうか「十方の如来は衆生を、一子の如く憐念す」、十方の如来はみな我々を一子の如く哀れんで下さるのである。又『浄土略文類』の中に

三世の諸々の如来出世のまさしき本意は、ただ阿弥陀不可思議の願を説かんとなり。

三世の諸如来もまた我々を哀れんで下さる。十方と云い、三世という、十方は十方法界ありとあらゆる仏のことである。三世は過、現、未三世の諸仏である。この三世十方の諸の如来が我々に對し、母の子を思うが如くに日夜我々を哀れみ、我々を念じて下さる。このようにして我々に知らそうとして下さる所は、結局何であるか。「ただ阿弥陀不可思議の願を説かんとなり」である。この諸仏が最後に何

心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします云々。

如来のやる瀬ないおこころで見て下さると、我々は崖へ今落ちかけている子供なのである。哀れ、今落ちて怪我をするが、今落ちて身を亡ぼすがと、如来のお心は子供のあぶない状を見て、悪い事をしてかまわぬと言つて下さるのではない。哀れあんな危い事をして居るが、あれは実に善くない。あの様に自分の事に目がつぶれて、あの様な危い事をして居るのである。当てにならぬ事をあてにし、頼みにならぬ事を頼みにし、歎くまじきを歎き、望むまじきを望み苦しんでいるのである。実にそれが可哀想であると、その我々の迷いの様を見て、大悲の心やむにやまれず、現われて下されたのが阿弥陀仏である。阿弥陀仏とはかかる我々の有様を見て、この私が哀れたというこのお慈悲の外に、阿弥陀仏のお心は無いのである。

段々話が広くなるが、いつも云うように、三世十方の諸仏のお心というも、この阿弥陀仏の広大無辺の慈悲を我々に知らすために、種々にこの私を哀れんで下さる。そのやる瀬ないお心の外に十方諸仏のお心もないのである。『愚

禿抄』に元照律師の『阿弥陀經義疏』の文をお引き下され勢至章に云く、十方の如来衆生を憐念したまうこと母

をお知らせ下さるのであるか。即ち「大悲の広大な親がましして、為すまじき事をなし、思うまじきことを思う、その者を哀れみ、その者を救わんために阿彌陀仏と姿を現わし、南無阿弥陀仏と名告りをあげ、光明をもって照らし呼びかけていて下さるぞ」とこれを告げ、これを我々に知らせんと一念から、十方三世の諸仏が我々に向うていて下さるのである。このやる瀬ないおこころが十方三世諸仏の大悲である。十方三世の諸仏は各自でんでに異った方面に導き、異った物を与えようとして下さるのではない。

諸仏の願がま・ま・ま・なのも、それはみな縁に従い、機に應じ、手引きし、導きをして下さるのである。いよいよ知らせて下さる処は、阿弥陀仏不可思議の願、不可思議の親心、これを知らせて下さる外にはないのである。

そのやる瀬なき親心とは何であるか。即ちもし衆生を我と同じき仏となさずば、我も仏とは成るまい、というこのお心である。言い換えると、すでに正覺をとられて仏となられたからには、一切の衆生を救わすばおかぬ、罪があればある程その者が可哀想である、障りがあればある程、その者があぶんである、というお心である。この広大の親心を頂かせずにはおかぬという広大な思いをもって、十方諸仏がこの私を眺めて居て下さるのである。薬師如来には薬師如来の本願があり、地藏菩薩には地藏菩薩の本願がある

も、これはこの親心を知らせるために、その者、その者の機縁に応じてお手引き下さるのであって、いよいよ知らせて下さる所は、大悲の阿弥陀仏の親のおまこと心、これを知らせて下さる外にはないのである。

『和讃』に

諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆえなれば

金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報すべし

かくの如く諸仏が色々と手を廻わし、姿をかえてお導き下さるが、結局この弥陀の大悲を知らせて下さる外はないしかも諸仏が弥陀の本願の証誠に立ち、護り念じてこのお慈悲一つに引き入れて下さるのも「悲願成就のゆえなれば」で、もともと阿弥陀仏の第十七願に、十方諸仏が、このわが心を伝えるようにとの阿弥陀仏の本願がある。これをもとになって、十方諸仏が証誠護念して下さるのである。それだから十方三世の諸仏の証誠護念ということも、結局は阿弥陀仏のやるせない思いをもって我々を護り、待ち受けて居て下さるのである、釈尊がこの世にご出世されたのも、この広大な親心を知らせんとの外にはないと、これが親鸞聖人のお教化である。

○

さて、「日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて」のお示しがここである。『和讃』に

かねば釈尊が五濁惡世に出て下された所詮もなくなってしまう。故に早くこのお慈悲を頂けよと、あなたの心のあり切りを打明けてお示し下されたのが「唯除五逆誹謗正法」の文意である。

して見れば悪人だからと捨てられるというでなく、その浅ましい者、罪の者が哀れであるというお慈悲から現われて下されたのが、弥陀の本願である。十方微塵世界の念仏の衆生を撰取して捨てぬというのが阿弥陀仏のお意趣である。先き程からいう十方三世の諸仏の仰せというのもこの外にない。

以上は釈尊と弥陀仏を「釈迦弥陀は慈悲の父母」と父母に譬えられた上から申したのであるが、又聖人は光明名号の因縁と申されて、南無阿弥陀仏の六字名号の父のお名告り、又私を可哀想と念々念じて下さる阿弥陀仏の光明の母、この南無阿弥陀仏の父の名号に呼び醒まされ、八万四千の光明の母は慈悲の懷をひろげ、撰取して下さるとお示し下されてある。又『勢至和讃』には、

超日月光この身には 念仏三昧おしえしむ

十方の如来は衆生を 一子のごとく憐念す

子の母をおもう如くにて衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず 如来を拝見うたがわず

我もと因地にありし時 念仏の心をもちてこそ

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば阿弥陀と名づけたてまつる

十方世界の念仏の衆生をみそなわし、その者を助けずにはおかぬという遣る瀬のない思いをもって見ていて下さるのが弥陀如来の広大な親様である。阿弥陀仏とはこの者を助けようとの広大な親心、この外にない。釈尊がこの世に現われて下されたのも、ひとえにこの広大な親心を知らせて下されんがためである。釈尊が「唯除五逆誹謗正法」とお示し下されたのも外はない。ひとえにこの広大な親の慈悲を知らせたいとのあなたのやるせない親心からである。

本願に五逆と誹謗正法の者を除くところから、本願が見捨てるといふのではない。このような五逆十惡の者を助けるとあるやる瀬のない親の心がわからぬか、この広大な慈悲がまだ頂けぬか。この悪い者が哀れだという親の心のわからぬ者は可哀想である。このお心を頂かず、悪い事してもかまわぬなど言っている者は、親の本願にも漏れ、母の慈悲にも漏れるぞと、あなたが心を尽してお警め下されたのである。罪深き者が助からぬと言うて、罪深き者を見捨てられるというのではない。その様な者は弥陀の本願に漏れるぞとお示し下さる釈尊のおこころは、これほどまでしても母の心が分からぬか、との広大なお示しが「唯除五逆誹謗正法」の文である。実に広大な教化である、これを頂

無生忍にはいりしかば いまこの娑婆界にして

念仏の人を撰取して 浄土に帰せしむるなり

大勢至菩薩の 大恩ふかく報すべし

かくお示し下さるのも、大勢至菩薩が我々にこの南無阿弥陀仏を知らせんと、日本において法然聖人と現われて下されたのであるとよるこばれたのである。この大勢至菩薩が因位の時、この南無阿弥陀仏のお心を持ちてこそ無生忍のさとりに入られたのである。この故その菩薩が再びこの世に現われ、念仏の行者を導いて浄土に帰入せしめて下さるのが法然聖人お一代のお教化であると親鸞聖人がお喜びなされたのである。その法然聖人に遇いお慈悲にお気づきになった大もとは、聖徳太子のお導きによるのである。

大慈救世聖德皇 父のごとくにおわします

大悲救世觀世音 母のごとくにおわします

と讃えられたのも、聖人十九歳に太子の磯長の御廟で告命をうけ、二十九歳の時六角堂で告命のお導きにより、法然聖人に遇われて本願の意趣を頂かれたのである。

さてかく段々に頂くと、この他力真宗の教とは外の事ではない。大悲のやる瀬のない親様が、この罪深き者を見捨てぬとの大悲心から、或は光明名号の縁をもち、或はこの世に釈迦の父、弥陀の母と示し、或は十方三世無量の諸仏と共に、一子の如く憐念して下され、或は自分をお慈悲に引き

入れるためには、大勢至の法然聖人と願われ、観世音の聖徳太子と現われて下さり、種々無量のお手引きで本願のお慈悲一つを聞かせて下さったのであるから、このお慈悲一つを頂く外に無いとお喜び下さったのが親鸞聖人の他力真宗である。

そこで「日ごろ本願他力真宗を知らざる人、この弥陀の智慧をたまわりて……」この「たまわりて」が有難いのである。「……日ごろのころには往生かなうべからずと思いて、もとの心をひきかえて、本願をたのみまいらすをこそ廻心とはもうし候え」である。今迄自分の力で善くせんならん／＼と思っていたのは間違いであった、今迄自分の悪心を止めねばならぬと、自分で止められるように思っていたのは間違いであった。この到底助かられぬ、救われぬこの身を救おうとの広大な御本願であったか。このわが身知らずの者をかねて承知で、その者向けてのお呼声であったかと「日頃の心にては往生かなうべからずと思いてもとの心を引きかえて」である。

かく、やる瀬なき親心から哀ましますお慈悲なりしかと、気のついた一念が廻心である。日頃本願他力の親のお慈悲を知らぬ者が、ことに初めて弥陀の本願に気づき、今までの心をひるがえして、この自分を見捨て給わぬお慈悲一つと頂かせて貰うことが出来るのである。ここ一つより

絶対他力と体験 (三)

―信仰(仏凡一体)―

自然の牽く所

地上の物が地にひきつけられるのは、地の引力の然しめるところで、自然のことだ。悪業煩惱の塊が、輪廻の迷路にひきつけられるのは、業因のしからしめるところで、これまた自然だ。その地獄一定の私達が、弥陀の弘誓にひきつけられて、無碍絶対の大慈悲にほだされずにいられなくなるのは、如来選択の願心から発起するところで、これこそ自然の中の大自然だ。

地球の引力が秋毫の微もあまらずひきつけるように、およそ生きとし生けるものは、早晚、尽十方無碍光の大自然力にひきつけられないものはない。それはただ已今当(過現未)の問題であって、有無の問題ではない。

智慧の光明はかりなし 有量の諸相ごとごとく

光晝かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

信楽開発

さよう、私達はひきつけられるのだ。

外はないのである。私共自分の計らいで幾ら善くしたいとて善くなる心ではない、それが出来れば心配はいらぬ。その善くなれぬ私をよく承知して、その者が可哀想との大悲心から長い間御苦勞して下さったのが広大な親心である。この大悲心に気がついてこそ、この罪深い私が罪の深きを心配せず、又罪深くてもよいなどという横着心でなく、かく極悪深重の私が、深きお慈悲を蒙るとは、さてもさてもと喜ばせて貰えるのである。そこに自然に、ひとりで「もとの心をひきかえて本願を頼みまいらす」ことが出来るので、ここを我人共に気づかせて頂きたい事である。

よきことばども

現代人は言葉を多く知っているが、その意味を知らぬ。わかりきったと思うことのなかに、わかっていないことが沢山ある。 国際キリスト教大学・湯浅学長

何もわかっていないというのは、何もわかっていないので何もわからないということに本当のものが見つかる。

板画家・棟方志功

池山栄吉

赤坊がしよっちゅう母親の手しおにかかって育ちながら始めの間は何にも知らず、若干の月日がたつに従って、おぼろげに母親の顔を見覚えるようになると、それから日増しに慈愛のふところにひきつけられて、片時もそのそばを離れられなくなると同じように、久遠劫の昔から苦悩の旧里をさまようてきた私達も、自然のはからいにもようされて、どこどこまでも私達に同応して、私達の苦悩を御自身の苦悩としたまう大慈大悲の親心のましますと聞けて、かたじけなさ、とうとさ、うれしさが、しみじみ感じられるようになってくる。

十方諸有の衆生は 阿弥陀至徳の御名をきき

真実信心いたりなば おおきに所聞を慶喜せん

大悲無倦

点滴が岩をうがつように、長時不断の火と燃える如来真実の大悲には、さすがに厚い煩惱の水も菩提の水と溶けずにはいない。空気が地球を包んでいる以上、私達は―知る

うが知るまいが、一氣層の外へ出ることはできない。よしやそれが出来ることだとしても、私達は「思おうが思うまいが」到底如来の慈光からのがれることは出来ない。何故ならば如来の慈光は、横に十方を通じ、縦に三世を貫ぬいて、私達を圍繞し、照耀しつつあるのだから。

観音勢至もともに 慈光世界を照耀し
有縁を度してしばらくも休息あることなかりけり

光明の縁

夜のあけるのは日が出るからだ。親心の有難さが、つくづく思い知られるのは、子に孝心があるからではない、親心のあたたかみが、ようよう子の心に泌み透るからだ。己に出でて己にかえる、四囲の状況に追詰められて、堪えられない淋しさ苦しさに悲泣する時、同じ思いに雨涙したまう如来のやるせない思召しが、一念、私達の心の底に感応すると、ここに忽ち未曾有の心境が展開されて、あだかも電流が物体に通じたと同様、光を感じ、響きを感じ、熱を感じ力を感じ、心広く体ゆたかに「今宵は身にも余りぬる」嬉しさに「ただほればれと如来の御恩の深重なること」が身にしむばかりだ。これが「撰取不捨の利益」にあずかったというものだ。

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し
われらが無上の信心を 発起せしめたまいけり

奥山の葉（しおり）

ドイツの俚諺に「忘恩は世の返し」とあるのはよく穿ったものだ。その当否をたしかめるには、あらためて世の有様を詮議するに及ばぬ、銘々の心がたどってきた跡を振り返ってみればすぐわかる。實際私達は、恩を恩とも思わずにいるばかりか、時としては返すに仇をもつてすることさえある。

けれど姥捨山の昔話にある年寄った母を捨てに行った不孝な子も、子のかえるさのよすがにと、道すがら枝を折りながら行く母の心遣には、さすがに親の情を思い知らされずには居られなかったように、名利の山に踏みまよう具縛の凡衆をみちびいて、涅槃の門に入らしめようと、手に手をつくして下さる矜哀の善巧には、いかにしぶとい私達もいつかは信心の智慧にうなづかされて、自身の罪惡の深く如来の御恩の高いことを、思いしらずには居られなくなってくる。

智慧の念仏うることは 法藏願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし

無眼無耳

現今の心理学界で、智能啓発の上の奇蹟と見られているヘレンケラー女史が、その生後僅かに二十ヶ月目に早くも視力と聴力を失って、盲聾者、従って啞者として、暗黒無

声の境涯にそだちながら、遂に最高学府の教養までも終えて、立派な淑女となれたのは、八つの時から傍を離れず、親身も及ばぬ丹誠をこらして導いてくれた家庭教師アネ・サリバンのお蔭なのだ。勿体なや祖師は紙衣（かみこ）の九十年、無眼無耳の私共の教化のために、生涯を捧げて下さった聖人のご苦勞が、これにつけても偲ばれるではないか。十方世界を照耀する弥陀仏日の光明にはぐくまれて、無明煩惱の闇がようように薄らいで、所謂宿善開発の暁、選択の願心に信順して、念仏する身となるのは、一から十まで如来の賜で、渾身煩惱の塊である私達の方から持出す方としては微塵もない。全く仏智不思議の功きによるのだ

信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり
自然即ち報土なり 証大涅槃疑わず

信心の下賜

未開の土人が官の勧めで、都見物に上るには、着のみ着のまま手ぶらでよい。乗車乗船の切符までただ貰える。如来が私共衆生を、極楽無為涅槃界に招かれるについては、本来無一物と見て取られた私共に向って、何一つ土産に持って来いと注文されないのみか、本願に乗托するになくてならない信心までもあてがわれる。

「速に寂靜無為の樂に入るには、必ず信心を以て能入となす」衆生の成仏のために自分の成仏を賭けられた大慈大

悲の仏心と、煩惱成就の凡情とは、如来からたまわる信のまことに貫ぬかれて、不可分的に結びつけられ、金輪際離れる氣遣いのないものとなる。丁度河水の大海にそいで同一鹹味となることならない。

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に
煩惱の衆流帰しぬれば智慧のうしおに一味なり

仏凡一体

仏凡一体、絶対と相對の融合、有限と無限の一致などという宗教の極致はこうしてここに実現される。

世にさまざまの宗教もあるうが、救われる衆生が、助かることによつて、救う教主もたすかるといふ誓願の持主は、弥陀一仏を除いては他にあるまい。これ実に如来の無上法たるゆえんで、執持鈔に「名号につきて信心をおこす行者なくば、弥陀如来撰取不捨のちかい成ずべからず。弥陀如来の撰取不捨のお誓いなくば、また行者の往生淨土の願いなしによりてか成ぜん。されば、本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願という、このいわれなり」とあるのも、つまり機法一体の必然的対応を指摘したものに外ならない

五濁惡世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて 自然の淨土に到るなれ

金剛不壞の真信

自分の思索ででっちあげたものは、その思索の移るにつれて動いて行く。時々、自分の気分に影響されるような信心ならそれは質物に違いない。本統の信心はこちらから出るのではない、向うから注ぎこまれるのだ。如来の常住にして変易することのない限り、そのたまもの信心も、一旦決定したが最後、金剛不壞だ。どんなことがあっても終生変る筈がない。こう信心の確立した状態を正定聚不退転という。幸にこの境に住すると、往生の業事はすでに悉く成辦されたので、そうした人は最早凡夫にして凡夫ではない。単なる凡夫としてはすでに命終したもので、必ず成仏するにきまつてゐる点は、必定の菩薩と同格だ。この意味ではすでに生れ更ったものといえる。護信の利那を界として、前念命終、後念即生というのはこのことだ。

金剛堅固の信心の　さだまる時をまちえてぞ

弥陀の心光摂護して　ながく生死をへだてける。

信心と念仏

一陽来復して、雪や氷が溶けかかると、山川にセンセンの音をきくように、胸一杯にはりつめた煩惱の堅氷が、信樂開発の法悦に、他力の信水と溶けそめて声に出たのが念仏だ。

内に有難いと思う念が萌せば、外に有難いとさけぶ声が出ずにはいない。阿弥陀仏に帰命せよとの本願招喚の勅命

を得証す」(教行信証)

自然と作善

私はどうも概して書家の書を好かない。之に反して小学一年生の書いた字を見ると、いつもすくなくならず感心させられる。前者は一見美事であるが、後者の天真爛漫、少しもはからいの交らないのとくらべて、いかにも技巧を弄したいやみのあるのをまぬがれない。

他力本願に信順して、至心信樂、おのれを忘れて称える念仏は、罪を滅ぼし功德を積み資料としての念仏とは雲泥の差がある。一は自然であるのに、一は作善だからだ。羊の皮は一狐の腋に如かず、自力の念仏百万遍は、他力の称名一遍に及ばない。

真実信心の称名は

弥陀の廻向の法なれば

不廻向となすけてぞ

自力の称念きらわるる

自然の念仏

生死に輪廻して火宅を出られない私達が、行にもあらず善にもあらず、有漏の穢身そのままで、無生忍を体得して臨終一念の夕、大般涅槃を超証する身の上となられたのは唯浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。と思ひ知つて、且つこの行き易くして人なき門に入るのになくってはならぬ信心を手に入れることが出来たからだ。その信心とは外でない、他力の信の一念だ。自然の念仏だ。「ただほ

が聞えた以上は、その反応として、阿弥陀仏に南無したてまつると、声に出るのは当然だ。しかし、念仏は自然の声だ。自力の行とし善として他力救済の資に供する功德なのではない。

信心の発露

信心と念仏とは別々のものではない。念仏は信心の発露でなくてはならぬ。弥陀の御恩が深重なことの思われるにつけ、報恩謝徳の念が言葉となり声となって、口にあらわれたものでなくてはならぬ。

こうした消息は独り絶対他力の信を体験した人にしてはじめて会得することが出来るのみだ。空気が鼻孔を通じて気管から肺に達した後、今度は逆に気管から鼻孔を通じて外に出なければならぬように、内に他力の信心を恵まれた上は、それが他力の念仏となって口に出すにはいない。念仏は信仰に生きる人の氣息だ。「ひとえに他力にして自力を離れたる故に行者のためには非行非善なり」とは、単なる論理的の仮定ではない。文字通りの体験なのだ。

「徳号の慈父ましますば、能生の因かけなん。光明の悲母ましますば、所生の縁をむきなん。能所の因縁和合すべしといえども、信心の業識にあらずば、光明土に到ることなし。真実信の業識、これ即ち内因とす。光明名号の父母、これ即ち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身

ればれと弥陀のご恩の深重なること、つねに思い出し」まいらせてまうされる念仏がそれだ。

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうる人は

憶念の信つねにして

佛恩報ずるおもいあり

光るものは皆黄金とは定まらない

光るものはみな黄金とは限らない。口に称える念仏は必ずしも他力の信の発露とはきまつていない。これで心を清めよう、罪を消そうという念仏は、所謂自力修善の一種なので、本願に相應する行ではない。「真実の信心は必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せず」肝腎かなめの信心がかけていられると、弘誓の船に乗り込もうとしても、足が自力にほだされて、地に引着いて離れない。従って大悲の風にまかすという決定的態度に出られない。

弥陀大悲の誓願を

ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべし

一心帰命

他力摂生の思召しが聞えたからは、自力をさしはさむ余地はない。汽車に乗込んでしまえば、もうかけだすに及ばない。難行陸路の我がはからいがやまないのは、易行水道の大願業力に乗ずる決定がついて居ないからだ。

天親菩薩は「世尊、われ一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」と告白された。「天親論主は一心に、無碍

光に帰命す、本願力に乘ずれば、報土に到るとのべたまう」「論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまう」

天親の親と、曇鸞の鸞とを取って名乗らせられた聖人が「よき人の仰せ」に聞かれた「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とは、大小の聖人、軽重の悪人、すべてに通じて、信仰の始（アルファ）であり、終（オメガ）でなくてはならぬ。これより足りないところのあるものいけなしいし余計なもの、ひっついていいるものいけなしい。

無義為義

ただ念仏の一行に撰取の因をまとめた如来選択の願心が取柄のないこの私をあくまで見捨てぬ御真実と頂けて、大悲の矜哀と罪惡の自覺と、びったり出遇ったところ、これがいわゆる函蓋相應の境地で、不断煩惱得涅槃の水ももらさぬ妙諦は、ことに確認されると同時に、現在撰取の光明裡に自適するようになり、わが計らいというものは、根本的にその存在の理由を失ってしまふ。

「念仏には無義をもて義とす」とは、この成行きを云ったもので、如来の慈悲に目が覺めて、私の計らいのやんだところが如来のおはからいだというところだ。

この文は實に、信心の眞實を試めす計量器で、このはかりにかけてバランスを得るものは合格、さうでないものは

やんだとき、一生一度の廻心なのだ。

さきにはわが計らいが行詰って、手も足も出なくなってしまうのが、今は如来の慈悲に腹ふくれて、わが計らいの手足を投げ出したすがただ。

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしと悲しむな

生死大海の船筏なり

罪障重しとなげかざれ

自覚

善をしなくては助かるまい、悪をやめないでは救われまい、智慧をみがき学問を究めなければ、本統のところがかかるまい。ああしないでは、こうしてはいけなないと、わが計らいをさきに立てて、それが思う様にいかないので、結局行詰って悶えるのは、自分にまだひとかどの取柄があると思っているからだ。

然るに、その実何の取柄もない、善も思うようにならず悪もやめられず、抑えきれない欲求の引きずるままになっている繋縛の凡夫のはかなさを、かねてしろしめしてお手当て、他力の悲願に目がさめたとき、始めて自力の力瘤がとれて、羽目をはずしてくつろぐことが出来るのだ。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず

仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず

（未完）

不合格ときっぱり極めがついてしまふのだ。

「引金は心で引く手で引くな」というのが、射撃の秘訣だそうだが、信仰もそんなもので、是非とも信じなくてはならないとりきんでみたり、わが称える念仏で往生しようと思ったり、心の上や行の上に、ぎこちない力瘤の見える間は、まだまだ自然の妙境とは、相去ること遠しと云わなければならぬ。

「寒夜に霜のおくように」如来のご恩が身に沁みて、称えずに居られなくなる念仏こそは、発して正鵠を失わないものと言えるのだ。

聖道門のひとはみな

自力の心をむねとして

他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり

廻心

うばたまの黒闇の中をてさぐりし、しりごみしているうちにバツと電灯のついたようなのが、お慈悲にめざめた時の感じだ。

深淵にのぞみ、薄氷をふみながら、戦々競々、魂も身にそわず、身体もすくんで、こわばってしまうかと思われるなかで、不図、そうした自分をやるせなく哀れとみそなわして、このたびこそは落すまいと、飽くまで見放したまわぬ絶大の力がましますのだと気がついて、その広大な同情につつまれて、もがく力の抜けた刹那が、わがはからいの

永遠の言葉

○

ドストエーフスキ

人間が不幸なのは、自分が幸福であることを知らないからだ。ただそれだけの理由なのだ。 「悪霊」

○

マーテルリンク

最も不幸な人々、最も貧窮な人々も、彼等の存在の奥底に、汲みつくせない美の宝を包蔵している。

それを汲み出す習慣を身につけることだけがだいたいな問題である

○

スイス。ユング（医学者）

「中年以後、死に対する確固とした考えのついた人のみが生き生きとした生活をする」

○

アウグスチヌス

外に出るな、あなた自身に立ち返れ……

内なる人にこそ真理は宿るのである。

○

源信僧都

夜もすがらほとけのみちをもとむればわがこころにぞたずねいりぬる。

○

道元禪師

生死の中に仏あれば

生死なし

「正法眼蔵」―生死。

助道の人の法

——春を待つところ——

高千穂 徹 乗

源信僧都は『往生要集』の終りに、助道の人法と題して私達の修道を助ける人と法とを示していられます。それは一つには、すぐれた師匠によくつかえてその教示をうけること。二つには法友と共に互に励み助けあうて道を修めること、三つには真実の道理を記された教書を常にひらき読んで、これを習学することにあります。

更に僧都は般舟經の偈を引いて、若し遠方に尊い教書があると聞いたら、どんな遠方までも行き、それを求めて、常に読誦し忘れぬようにせよ。たとえ聞持することが出来ずとも、その教書を求めただけでも、その功德ははかることができない。ましてこれを読んで、その真実を受持することが出来たら、その福德は広大であると述べていられる。然るに今日では、私達は遠い所に尋ね求めなくても近い所に多くの良書を恵まれています。又常にすぐれた講師のお話をきき、いつでも良い法友と語りあうことができるので、求道と修学の助縁としては、申し分のないのである。

が、現代人の精神の空白となつているのであります。

源信僧都は今から千年も昔に生れた人ですが、その書かれたものを読みますと、人生に対する見方の深さと、自分をつめる眼のきびしさというものに強く胸をうたれ心をうごかされます。

たとえば『往生要集』の初めに、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの世界について、詳しくその業因と業報を説いてありますが、それは遠い世界のことではなくて、なまなましい現実の姿を記したものであり、また知らぬ他人のことではなくて、この私の只今の姿を描いたものであります。

さらに浄土の実在について詳しく説明されてありますがそれは人生の課題をもつ者にとって与えられた解答として万人が受容せねばならぬものであります。即ち如来への道は人生の疑問を解決するものとして、全人類が必ず歩まねばならぬ道であります。

○
浄土の教は死に結びついた生の現実を問題とするのであって、それは人間の本質的な課題に対する解決が浄土の教として示されているわけであります。

「人間は死ぬものだ」ということを契機として、浄土の

○
現今の多くの人は、ただ世俗の習慣や隋性のうえに坐りこんで、宗教のまね事をしていただけで、人生の課題として、自分自身が正しく宗教を信じているのか否かをきびしく自分に向って確かめようとしないのであります。

一般に宗教を考える時、二つの動機があります。一つは人間が「死」と対決した時の動揺や恐怖、更に今一つは人間の罪惡の問題であります。

私達は人間である限り、この死と罪の二つの動機は必ず持っているはずであり、私達はいやでもこれらの問題と直面して自分で自分の心を決めておかねばならぬ重大事であります。これに対してどのような態度をとるかによって私の現実の生き方は決定され、また私の生活の目標が明らかになるのであります。

然るに近頃の人は、これらの課題についてほとんど無關心のようであります。これに真剣に取り組んでいないこと

教が強く私達を動かしてきたのでありますが、それは単に死が恐ろしいとか、悲しいというような単純な気持ちからではなく、飽くまで人間の深刻な課題として、死と生とが自覚的に反省され「死」を媒介として「生」に問いを投げかけてくるとき、人生に対する真剣な疑問がうまれてこなければなりません。

ここに私達は、現実をこえたものから問いをかけられ、その問いに答えるためには、現実をして、みずから超えた世界にむかわしめずにいられぬことになります。またその現実には、現実をこえた世界から照り返えされるとき、はじめて真実の姿を見いだすことが出来るのであります。

○
月の光に照された自分の暗い影をみつめて、しみじみとした反省の心にうたれるとき、その影の暗さに気づくと共に、その暗さを知らされた月の光を仰いで、はればれとした心になることができます。

○
源信僧都は自分の頭髮が白くなっているのに、心は俗世の塵に染まり、死ぬまで欲のおもいをすることが出来ない。自分は頭を剃っても、心の欲心を取りさることはできず、法衣の色は美しく染めても、自分の心をほとけごころに染めようとしないうちに、実に恥ずかしい限りであると述べられております。

このような罪惡深重の私は、惡道の世界より外にゆくべきところのないものであるが、私如き愚かな惡人が、この身このままで、どうしたら救われて、仏の淨土に生れることが出来ようかと、ねてもさめても眞劍に思いやんで、眞實の道を求められたのであります。

かくて僧都は、自分は煩惱に眼をさえられて見ることはできないが、仏の大慈悲は、ものうきことなく、常に我身を照らしたもうことを体得されて、極重の惡人が救われる道は、ただ弥陀の本願に全托して、その御名を称えるより外にないことを信知して念仏されたのであります。

○ 僧都は常に經典に示された釈尊の言葉をとおして、仏様の心を見究めようとされました。それはすべての人と物との眞實の姿を見るだけでなく、それらのものの背後に、常に仿いでいる力を見いだそうとされたのであります。

眞實の姿を見ればみんな差別の相であり、すべての人の有様を見ればどこまでも違った形をしています。然しそれは本来の眞理に迷うて執着を重ね、罪業をつんでもその報いをうけている業苦の姿であり、このように私の業苦が深ければ深いほど、仏様の大慈悲はいよいよ強く私の業苦の上に仿いて、成仏せしめずはやまぬ念力が動いて下さるのであります。

を覚えるのです。学苑の庭にでると、牡丹のかたい茎から赤い芽が伸びて、黒い土の下から草花の若芽が土をおしあげています。踏のおがほぐれて花となっているのを見ると、正しく春が近づいてきたことを知るのであります。

○ 私はかつて日本の一官吏が、シベリヤの刑務所に入れられた時の手記を読んだことがあります。彼は暗い獄舎のなかで数十日すごしましたが、彼を苦しめたものは、食物や寢具の粗末なことではなく、くる日もくる日も、暗い室にとじこめられて太陽の光を見ることができないことでした。しかるに或日、彼が室の上を見ると、わずかな板のすきまから、一本の糸のような陽の光が流れこんでいました。彼は躍りあがってその一条の光をむさぼるように手にうけ身に浴びました。彼はそれから毎日毎日、その光をみつめてあるあいだは獄舎にいることを忘れ、明日もまた、この光に遇うことの喜びによって、今日の苦しみに堪えることができたということです。

○ 冬の寒さに堪えて、春のおとずれを待つ心ほど、しみじみとしたものではありませんが、それは冬が長く寒さが厳しい土地の人々にとっては、更に一層深く大きいものです。北陸から関東へと雪が深い土地に長い年月をすごされた

天上に高く輝いている月が、私の両手にすくいあげた水の上に、その美しい影を映しているように、淨土の仏様は私共の認識を超えた境界であります。その無辺の聖徳が私の識心に満入して、私の信となり行となり、おがむ手となり、たしなむすがたとなって、日々の生活のなかに仿きかけてくださるのであります。

私達は人間に生れて、仏法にあい、不動の信心に恵まれて限らないみ光のなかに生かされている喜びを高らかに歌わずにはいられませぬ。

○ 暁の鐘の声こそうれしけれ 永き浮世のあけぬとおもへば (続古今集 源信僧都)

私は京都に三十年あまり住んでいましたので、京都の風物は私にとって離れ難いものとなりました。けれども暖かい南国に生れて、明るい青空の下に少年時代をすごした私は、一月から二月にかけての底冷えのする寒気にはひどく痛めつけられました。

それでも二月の節分の行事がすみ、立春の声を聞くようになると、すり硝子を通して流れてくるような日の光にもなんとなくやわらかいぬくみが感じられて凍りついた私の心が、少しづつ溶けてゆくように思われます。比叡おろしの寒風は身にしみるのですが、私は春を待つ心のときめき親鸞聖人は、寒さをしのいで春を待つ人の趣味を強く身にかけて体得されたことでありましょう。聖人の著書には、光について記されたものが非常に多いように思われます。

『弥陀如来名号徳』という法語は、阿弥陀仏の十二の光について讃仰されたものですが、そのなかに、

「阿弥陀仏は智慧のひかりにておわしますなり。このひかりを無碍光仏と申すなり、無碍光と申すゆえは、十方一切有情の惡業煩惱のところにさえられず、へだてなき故に無碍とは申すなり。弥陀の光の不可思議にましますことをあらわし、知らせむとて帰命尽十方無碍光如来とは申すなり。無碍光仏をつねに心にかけ、称えまつれば十方一切諸仏の徳をひとつに具したまうによりて、弥陀を称すれば功德善根がわまりましますまぬゆえに(中略)かるがゆえに不可思議光仏と申すとみえたり」とあります。

真宗の原始教団の人のなかには、帰命尽十方無碍光如来の名号を本尊としてかけ、それを礼拝して、南無不可思議光仏などと称えたということですが、この素朴な宗教儀礼の中に、関東地方の長い冬にたえ、嚴寒をしのんで、春の訪れを待った人々の「光」にたいする深い感觸を見出すことができるようであります。

○ 梅一輪、一輪ほどのあたたかさ

梅が開く頃になると、寒氣も一日一日とやわらいできます。大寒が過ぎて暦の上で春の氣節に入ってもまだ寒さはうすらぎませんが、それでも余寒というものは、次第に陽氣が加わって、寒さも日をおうてやわらぎます。早春のきびしい朝の霜をふんで、梅の蕾がふくらんでゆくのを眺める感興もまことに捨てがたいものであります。

博多の万行寺の七里恒順師はすぐれた大徳ですが、或時一人の求道者が次のようにたずねました。

「私は信心をいただいたのちも、我欲や我見の心が強くおこりますが、どうしたものでしょうか」

と。恒順師は

「それはお天氣でいえば余寒のようなものである。寒があけて春の季節になっても寒さは一層きびしい事もある。しかし余寒は長続きがしないで次第にやわらいでゆく。これと同じように私の煩惱の心は、信心いただいたあとに、はげしくおこることもあるが、それは長続きはしない。煩惱がおこるしたから、懺悔の心があらわれて、あやまりはてるようになる。お慈悲を喜ぶにつれて、身も心もやわらいで、生き抜く力を恵まれるのです。私達は毎日忙しい仕事に追われていると、怒り腹立ちの心と、愚痴の心がおこり、欲も深くなるもので、御法義のさまたげとなるものであるが、それらのことが縁とな

念 仏 詩 抄

ご信心さま

親鸞聖人 ご和讃に

「煩惱にまなこさえられて

摂取の光明みざる身と

大悲ものうきことなくて

つねにわが身を照らすなり」

煩惱にまなこさえられて

摂取の光明みざる身と

知らしめ止まぬ

ご信心さまよ——

大悲ものうきことなくて

つねにこの身を守らすと

知らしめ止まぬ

り、かえって法義の喜ばれることも少くない。人の一生にはいろいろの苦難にあうこともあるが、これがまた縁となって、仏様のお慈悲に気づかせて頂く事にもなる。それで仕事がひまになり隠居の身になってから、みなの集りに出ようと考えている人もあるようだが、そんなことではいつまでたっても、み法に近づくことはできない。どんなに忙しい仕事の中にも務めて法縁にあうように心がけてみ法を聞くことにつとめねばなりません」恒順師の慈訓は、今もなお私たちをいましめ、さとされていくように、私はみずからをたしなむ言葉としております

『逆境の恩恵』第七節。



木 村 無 相

ご信心さまよ——

煩惱の背後にあって

守らせ止まぬ

大悲さまよ

ご信心さまよ——

ああ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ご信心さま

また

ナムアミダブツさま——

ただ ただ

聞くのである

- 21 -

る。これというのも、私が仏から一番遠い所に居り、併も到るところで失敗しては苦しんでいるので、何処でどうして居ようとも、慧眼もて常にみそなわし照護して下さるためである。また何時までたってもうだつがあがらず、さとりも開けず迷う身だから、限らない慈悲をそいで何時までも、何処までもたすけ遂げて下さるうためである。

その願成就して、光寿無量の無窮無辺の徳沢を私共にとどけて下さるために、十方にあまねく付き、三世を貫ぬく、時間と空間に障えられぬことばをえらびとって下さったのである。しかもわが弥陀は称え易く、持ち易い名号となつて現われて下さっていることは何と有難いことであらうか。そのお蔭で、煩惱具足の私共が、何時でも、何処でも、また何をしようとも、声に応じて現われて下さる弥陀仏に手を引かれて行くことが出来、そこに無量の徳沢をこうむるのである。

さて、教の鏡に照らされて見れば、煩惱熾盛の私共は、煩惱の黒雲に常に覆われて智目はつぶれ、限らない罪業に縛られて行足を欠ぐ身とて、真実の仏を知る智慧もなく、また知れたにしても微塵も近づく能力もない。こうした身を仏はかねてしろしめして、仏の方から御名となつて現われて下さることは何と有難い極みであらうか。生れたばかりの嬰兒は、泣くことと眠ることしか出来ないが、母のふ

ることの出来、多々ますます辨じ得る妙境を指すのであらう。

次にこの智慧について、私が医学生の時小鳥が立派な巢を造り、卵を温め、雛に餌をやわらげて興えて立派にそだてるのに驚いた。当時乳児死亡率が高かったので、この小鳥の智慧が人間にも出たらどんなに素晴らしいことかと考えさせられた。その時、大いにうなづいたことは、親子が一体化しているところから、子に要るものが親に要るものとして自然にあらわれて、子を立派に育てる事実に驚かされた。

仏教では、対象と一体化することを、同事の行（ぎよう）と呼ぶ、これは正しい智慧を持つ菩薩にして始めて出来ることである。健康な者が一角病人の身になった積りでも、多くは独りよがりになる。もし同事できると真実の智慧の働きも現われるが、できない身は小さい自我の殻の中で枯死する外はない。仏教二千五百年の間に、無数の仏徒は仏智を目ざして修学修行をはげみながら、途中で没落の憂き目を見ていることは痛ましい限りである。

鶉の真似する鳥は水に溺れる、智目のない身が菩薩の真似は出来ない。さて、このどうにもならぬ身に、親が子に同じるように、弥陀仏が私共に同じて下さる真実心が徹到する時、信心の智慧がひらけるのである。孝は百行の本と

くませてくれる乳房一つで育てられるように、私共も弥陀仏の大悲の乳房の名号六字に生かされて、往生成仏の無碍道をたどらせて頂けるのである。この御名以外には私共が仏心と交流することは不可能である。

打ち明けて申せば、私は長い間、御名と仏体とを別々にして居た、そうではなくて真応身の仏が御名となつて下さっているのである。そこに御名が現われて下さるまじまじ、私の生きたおまことにふれるのである。しかも「賢に遇えばおのずとゆたかなり」と諺にあるように、何時でも何処でもまた何をしようとも、仏が御名と現われて下さるので、無量無辺の徳沢に自然に浴させて頂けるのである。

名号は智慧海より建立す

私共が智慧があるの無いのと云うが、皆相對差別の分別智で、智愚共に毒がまじっている。仏智は煩惱の浄化された無漏智で、そこに毒は雜らない。われ賢しでなく、陽光の下に一切の燈火が光を奪われるように、智者の慢心も愚者の卑屈も洗除されて、唯仏智を喜ぶばかりとなる。

さて、仏教では智慧が根本になるので、戒・定・慧の三学を修している。戒を守って生活をととのえ、定に入つて心をしずめ、そこに鏡のような心に正しく物事がうつり、正しい智慧が現われることを願っている。禪家がよく「柳は緑、花は紅」と云うのは、心眼が開けて万事を正しく見

昔からよく聞かされたが、孝の字は、老と子と一つにとろけた心である、そこに道は自然に開かれる。

南無阿弥陀仏とは、ナムの凡心と、アミダの仏心とがとろけて一体化された久遠の親心である。そこに限らない智慧と極みのない慈悲ががやく。智慧の念仏とも、円融至徳の嘉号とも云われ、この弥陀仏の生きたおまことが我共の凡心に入りみちて下さるところに、信は道の元、功德の母とあらわれて、仏恩を仰ぎ、涅槃のさとりを頂くことが出来るのである。

白杵祖山先生は、如来が衆生化して下さるので衆生も如来化されて行くと仰言っている。妙好人の浅原才市翁は

あなたのところが わたしのところ

わたしのところが あなたのところ

わたしがあなたになるのじゃないが

あなたがわたしになるところ

と、その微妙な味わいをたたえている。聖人は和讃に

智慧の念仏することは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし

とたたえ、同時に

仏智うたがう罪ふかし この心おもいしるならば

くゆる心をむねとして 仏智の不思議をたのむべし

と、きびしく疑う罪を誡められている。

あとがき

年の瀬がまいました、十二月八日と聞けば大平洋戦争の火蓋が切られた日の記憶が強く刻まれています、この日は釈尊の成道の聖日で、禪家の人々は臘八の接心に心血をそそいでいられるのであります。十月二日にわが近角常観先生は開戦の直前、「教行信証があれば真宗は不滅である。歎異抄があるので、左右どちらに思想が紛糾してもそれにさえられぬ無碍の道がひらける」という大信念のもとに浄土に還えられました。

近くは昨年、十二月に熊本の高千穂徳乗師が急逝されましたことは真宗、ことに本派の人々には大きな灯火を失った感があります。私自身信交を頂いたのも僅か数年間で、その間打てばひびく、微妙な知己の心交を続けましたが、今は唯御名の中に間いつ応えつの、地下水的交流を知らされはじめました。「助道の入法」の一文を掲げて遺徳をしのばせて頂きます。

十月末日の池山先生の一道会には、長崎から十三人、四国や東京、広島、岡山の人々も参集。又旧友、田村、宮地、西元、川畑、福本、俵、葛西、津田等々四十余年前からの御同朋の顔も会い、京都西山の浄往寺は法悦に秋の紅葉の色をそえました。とは申せ、一人々々に、一期一会の思いあら

たなものを覚えしました。

木村無相さんは、旅の疲れと風邪気味で欠席、御名のたよりを寄せられ、榊原師が紹介されました。木村さんは私に「永年導きを蒙られた金子大学師の逝去、御別れをすませ、今度は御名の中で何時でもどこでもお会い出来る先生となつて下さい、ました」というような法信を貰いました。浄土で俱会一処させて頂けると経典にあります、が、現実の生活では、広大無辺な御名号の願海で、間いつ応えつさせて頂けることであります。しかも、相対有限の虚仮の姿を消されて、絶対無限の真実のままの徳にふれはじめるのであります。これも、師と別れ、友を失うという悲しみをとおしてそれを超えた、さえられぬひかりのおめぐみを知らされるのであります。

○

地獄篇よみおわりぬれば除外の鐘

鳴りわたるの何のきざしぞ

池山先生が、ダンテの神曲の地獄篇を読み終られた除夜の所感でした。正月にお伺いすると「ダンテの神曲は矢張り善悪のさばきだね」と聞きました。源信僧都の往生要集の地獄は、僧都自身の地獄で、そこに神曲との根本的な相違を知らされました。歳末心の走せますまに、

ともかくもあなたまかせの年の暮

一茶

▼御案内▲

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。市バス、新郊通り二丁目下車。東入る三筋目左入る。
地下鉄、新瑞橋終点下車。
名鉄、呼続下車。又は本笠寺下車、市バス乗り換え。

○ 毎月二十四日、午前、午后。

昭和区小椋町二ノ四。教西寺法話会市バス、御器所通り下車、又は北山下車

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部 光雄

発行所 慈光社
振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七